

伊藤左千夫

浜菊



浜

菊

汽車がとまる。瓦斯燈ガスに「かしはざき」と書いた仮名文字が読める。予は下車の用意を急ぐ。三四人の駅夫が駅の名を呼ぶでもなく、只歩いて通る。靴の音トツトツと只歩いて通る。乗客は各自に車扉を開いて降りる。

日和下駄カラカラと予の先きに三人の女客が歩き出した。男らしい客が四五人又後から出た。一寸時計ちよつとを見る。と九時二十分になる。改札口を出るまでは躊躇ちゆうちよせず急いで出たが、夜は意外に暗い。パツタリと闇夜に突当つ

て予は直ぐには行くべき道に踐^ふみ出しかねた。

今一緒に改札口を出た男女の客は、見る間に影の如く闇に消えて終^{しま}った。軒燈の光り鈍く薄暗い停車場に一人残った予は、暫^{しば}く茫然たらざるを得なかつた。どこから出たかと思う様に、一人の車屋がいつの間にか予の前にきている。

「旦那さんどちらで御座います。お安く参りましょう、どうかお乗りなして」という。力のない細い声で、如何^{いか}にも淋しい風をした車屋である。予はいやな気持がしたので、耳も貸さずに待合室へ廻った。明日帰る時の用意

に発車時間を見て置くのと、直江津なる友人へ急用の端書はがきを出すためである。

キロキロと笛が鳴る。ピューと汽笛が応じて、車は闇中に動き出した。音ばかり長い響きを曳ひいて、汽車は長岡方面へ夜のそくえに馳はせ走った。

予は此この停車場へ降りたは、今夜で三回であるが、こゝう真暗では殆んど東西の見当も判らない。僅わずかな所だが、仕方がないから車に乗ろうと決心して、帰りかけた車屋を急に呼留める。風が強く吹き出し雨を含んだ空模様は、今にも降りそうである。提灯ちようちんを車の上に差出して、予

を載せようとする車屋を見ると、如何にも元氣のない顔を
をして居る。下ふくれの青白い顔、年は二十五六か、健
康なものとはどうしても見えない。予は深く憐れあわを催し
た。家には妻も子もあつて生活に苦しんで居るものであ
ることが、ありありと顔に見える。予も又胸に一種の淋
しみを包みつつある此際、うた転た旅情の心細さを彼がため為に
増すを覺えた。

予も無言、車屋も無言。田か畑か判らぬところ五六丁
を過ぎ、薄暗い町を二十分程走つて、車屋は車を緩めた。

「此の辺が四ツ谷町でござりますが」

「そうか、おれも実は二度ばかり来た家だがな、こう夜深に暗くては、一寸も判らん。なんでも板塀の高い家で、岡村という瓦斯燈が門先きに出てる筈だ」

暫くして漸ようやく判った。降りて見ればさすがに見覚え

のある門もんがまえ構、あたり一軒も表をあけてる家もない。車

屋には彼が云う通りの外に、少し許ばかり心づけをやる。車

屋は有難うござりますと、詞ことばに力を入れて繰返した。

もう寝たのかしらんと危ぶみながら、潜戸くぐりどに手を掛け

ると無造作に明く。戸は無造作にあいたが、這はい入る足は重い。当り前ならば、尋ねる友人の家に著ついたのである

から、やれ嬉しやと安心すべき筈だに、おかしく胸に不安の波が騒いで、此家に來たことを今更悔いる心持がするは、自分ながら訳が解らなかつた。しかし此の際咄嗟とっさに起つた此の不安の感情を解釈する余裕は固もとよりない。予の手足と予の体軀たいくは、訳の解らぬ意志に支配されて、格子戸の内に這入つた。

一間の燈りが動く。上り端あがの障子はなが赤くなる。同時に其その障子が開いて、洋燈ランプを片手にして岡村の顔があらわれた。「やア馬鹿に遅かつたな、僕は七時の汽車に來る事と思つていた」

「そうでしょう、僕もこんなに遅くなるつもりではなかったがな、いやどうも深更に驚かして済まないなア……」
「まアあがり給え」

そういつて岡村は洋燈を手に持ったなり、あがりはこの座敷から、直ぐ隣の茶の間と云ったような狭い座敷へ予を案内した。予は意外な所へ引張り込まれて、落つきかねた心の不安が一層強く募る。尻の据りすわが頗るすこぶ悪い。見れば食器を入れた棚など手近にある。長火鉢に鉄瓶が掛かつてある。台所の隣り間で家人の平常飲み食いする所なのだ。是これは又余りに失敬なと腹の中に熱いうねりが

立つものから、予は平気を装うのに余程骨が折れる。

「君夕飯はどうか。用意して置いたんだが、君があまりに遅いから……」

「ウン僕はやってきた。汽車弁当で夕飯は済してきた」

「そうか、それじゃ君一寸風呂に這入り給え。後でゆつくり茶でも入れよう、オイ其粽ちまきを出しておくれ」

岡村は自分で何かと茶の用意をする。予は急いで一風呂這入ってくる。岡村は四角な茶ぶだいを火鉢の側に据え、そうして茶を入れて待つて居た。東京ならば牛鍋屋ぎゅうなべやか鰻屋うなぎやでもなければ見られない茶ぶだいなるものの前

に座を設けられた予は、岡村は暢気のんきだから、未だま気が若いから、遠来の客の感情を傷そのうた事も心づかず、こんな事をするのだ、悪気があつての事ではないと、吾れ自ら頻しきりに解釈して居るものの、心の底のどこかに抑え切れない不平の虫が荒れて居る。

予は座について一通り久潤きゆうかつの挨拶をするつもりで居ただけけれど、岡村は遂に其機会を与えない。予も少しくぼんやりして居ると、

「君茶がさめるからやってくれ給え。オイ早く持ってきてこ
ないか」

家中静かで返辞の声もない。岡村は便所へでもゆくのか、立って奥へ這入って行った。挨拶などは固もとよりお流れである。考えて見ると成程一昨年来た時も、其前に来た時も改まった挨拶などはしなかつた様に覚えてるが、しかしながら今は岡村も慥たしか三十以上だ。予は四十に近い。然も互いに妻子を持てる一ぱしの人間であるのに、磊落らいらくと云えば磊落とも云えるが、岡村は決して磊落な質たちの男ではない。それにしても岡村の家は立派な士族で、此地にあつても上流の地位に居ると聞いている。こんな調子で土地の者とも交際して居るのかしらなど考える。百

里遠来同好の友を訪ねて、早く退屈を感じたる予は、余りの手持無沙汰に、袂たもとを探つて好きもせぬ巻煙草に火をつけた。菓子か何か持つて出てきた岡村は、

「近頃君も煙草をやるのか、君は煙草をやらぬ様に思つていた」

「ウンやるんじゃない板面いたずらなのさ。そりやそうと君も次が又出来たそうね、然も男子じゃ目出たいじゃないか」

「や有難う。あの時は又念入りの御手紙ありがとう」

「人間の变化は早いものなア。人の生涯も或階段へ踏みかけると、躊躇なく進行するから驚くよ。しかし其時々

の現状を楽しんで進んで行くんだな。順当な進行を遂げる人は幸福だ」

「進行を遂げるならよいけれど、児が殖えたばかりでは進行とも云えんからつまらんさ。しかし子供は慥たしかに可愛いな。子供が出来ると成程心持も変わる。今度のは男だから親父が一人で悦んでるよ」

「一昨年来た時には、君も新婚当時で、夢ゆめうつ現つという時代であったが、子供二人持ったの夫婦は又別種の趣があるろう」

「オイ未だか」

岡村が吐鳴^{どな}る。答える声もないが、台所の土間に下駄の音がする。火鉢の側^{そば}な障子があく。おしろい真白な婦人が、二皿の粽を及び腰に手を延べて茶ぶ台の上に出した。予は細君と合点してるが、初めてであるから岡村の引合せを待ってるけれど、岡村は暢気に済してる。細君は腰を半ば上りはなに掛けたなり、予に対して鄭^{てい}寧^{ねい}に挨拶を始めた、詞は判らないが改まった挨拶ぶりに、予もあわてて初対面の挨拶お定まりにやる。子供二人ある奥さんとはどうしても見えない。

「矢代君やり給え。余り美味^{うま}くはないけれど、長岡特製

の粽だと云って貰ったのだ」

「拵こしらえようが違ちがうのか、僕はこういうもの大好きだ。

大いに頂戴しよう」

「余所よそのは米の粉を練ねってそれを程よく笹ささに包むのだけれど、是は米を直ぐに笹ささに包んで蒸すのだから、笹をとるとこんな風に、東京のお萩はぎと云ったようだよ」

「ウム面白いな、こりやうまい。粽という名からして僕は好きなのだ、食たって美味いと云うより、見たばかりでもう何となくなつかしい。第一言い伝えの話が非常に詩的だし、期節はすがすがしい若葉の時だし、拵こしらえようと

云い、見た風と云い、素朴の人の心其のままじやないか。淡泊な味に湯だった笹の香を嗅ぐ心持は何とも云えない愉快だ」

「そりや東京者の云うことだろう。田舎に生活してる者には珍らしくはないよ」

「そうでないさ、東京者にこの趣味なんぞが解るもんか」
「田舎者にだって、君が感じてる様な趣味は解らしない。何にしろ君そんなによくば沢山やってくれ給え」

「野趣というがえいか、仙味とでも云うか。何んだかこう世俗を離れて極めて自然な感じがするじやないか。

菖蒲湯しょうぶゆに這入って粽を食った時は、僕はいつでも此日本と云う国が嬉しくて堪たまらなくなるな」

岡村は笑って、

「君の様にそう頭から嬉しがって終しまえば何んでも面白くなるもんだが、矢代君粽の趣味など嬉しがるのは、要するに時代おくれじゃないか」

「ハハハハこりや少し恐れ入るな。意外な所で、然も意外な小言を聞いたもんだ。岡村君、時代におくるとか先んずるとか云って騒いでるのは、自覚も定見もない青臭い手合の云うことだよ」

「青臭いか知らんが、新しい本少しなり読んでると、粽の趣味なんか解らないぜ」

「そうだ、智識じゃ趣味は解らんのだから、新しい本を読んだとて粽の趣味が解らんのは当り前さ」

岡村は厭いやな冷ひやかな笑いをして予を正面に見たが、鈍い彼が目は再び茶ぶだいの上に落ちてる。

「いや御馳走になって悪口いうなどは、ちと乱暴過ぎるかな。アハハハ」

「折角でもないが、君に取って置いたんだから、褒めて食ってくれば満足だ。沢山あるからそうよろしければ、

盛にやってくれ給え」

少し力を入れて話をすると、今の岡村は在京当時の岡村ではない。話に熱がなく力がない。予も思わず岡村の顔を見て、其気張りのないのに同情した。岡村は又出し抜けに、

「君達のように文芸に遊ぶの人が、時代おくれな考えを持っていてはいけないじゃないか」

鸚鵡おうむが人のいうことを真似るように、こんな事をいうようでは、岡村も愈いよいよ駄目だなど、予は腹の中で考えながら、

「こりやむずかしくなってきた。君そういう事を云うのは一寸解ちよつとったようできて、実は一向に解とって居らん人の云うことだよ。失敬だが君は西洋の真似、即西洋文芸の受売するような事を、今の時代精神と思ってるのじゃないか。それじゃあ君それは日本人の時代でもなければ精神でもないよ。吾々が時代の人間になるのではない、吾々即時代なのだ。吾々以外に時代など云うものがあつたまるものか。吾々の精神、吾々の趣味、それが即時代の精神、時代の趣味だよ。

いや決してえらい事を云うんじゃない。傲慢ごうまんで云うん

じやない。当り前の頭があつて、相当に動いて居りさえすれば、君時代に後おくれるなどいうことがあるもんじやないさ。露骨に云つて終しまえば、時代におくれやしないかなどいう考えは、時代の中心から離れて居る人の考えに過ぎないのだらうよ」

腹の奥底に燃えて居つた不平が、吾れ知らず気きえん粉に風を添えるから、意外あっけに云い過した。余りに無遠慮な予の詞ことばに、岡村は呆あっけ氣にとられたらしい。黙つて予の顔を見て居る。予も聊いささかきまりが悪くなつたから、御馳走して貰つて悪口いうちや濟まんなあ。失敬々々。こう云

つてお茶を濁す。穏かな岡村も顔に冷かな苦笑を湛たえて、相変らず元気で結構さ。僕の様
に田舎に居っちや、君の所謂いわゆる時代の中心から離れて居るからな、何も解らんよ。とにかくここでは余り失敬だ。君こっちにしてくれ給え。こういって岡村は片手に洋燈を持って先きに立った。あアそうかと云いつつ、予も跡について起つ。敢て岡村を軽蔑けいべつして云った訳でもないが、岡村にそう聞取られるかと気づいて大いに気の毒になった。それで予は俄にわかにおとなしくなつて跡からついてゆく。

内廊下を突抜け、外の縁側を右へ曲り、行止りから左

へ三尺許りの渡板を渡って、庭の片隅な離れの座敷へく
る。深夜では何も判らんけれど、昨年一昨年と二度とも
ここへ置かれたのだから、来て見ると何となくなつかし
い。平生は戸も明けずに置くのか、空気の蒸せた黴臭い
例のにおいが室に満ちてる。

「下女が居ないからね、此の通り掃除もとどかないよ。
実は君が来ることを杉野や渋川にも知らせたかったが、
下女がいらないからね」岡村は言い分けのように独ひとりで物
を云いつつ、洋燈を床側に置いて、細君にやらせたらと
思う様な事までやる。隣の間から箒ほうきを持出しばさばさ

と座敷の真中だけを掃いて座蒲団ざぶとんを出してくれた。そうして其のまま去って終った。

予は新潟からここへくる二日前に、此の柏崎かしわざき在なる渋川の所へ手紙を出して置いた。云ってやった通りに渋川が来るならば、明日の十時頃にはここへ来られる都合だが、こんな訳ならば、云うてやらねばよかつたにと腹に思いながら、とにかく座蒲団へ胡坐あぐらをかいて見た。気のせいかいやに湿りぼく腰の落つきが悪い。予の神経はとかく一種の方面に過敏に働く。厄介に思われてるんじゃないかしら、何だか去年や其前年来た時のようではな

い。どうしたって来たから仕方なしという待遇としか思われぬ。来ねばよかつたな、こりや飛とんだ目に遭つたもんだ。予は思わず歎息たんそくが出た。

岡村もおかしいじやないか、訪問するからと云うてや
つた時彼は懇ねんごころに返事をよこして、楽しんで待つてる。

君の好きな古器物でも席に飾って待つべしとまで云うて
よこしながら、親父さんだつて去年はあんなに親切らし
く云いながら、百里遠来の友じやないか。厄介というて
も一夜か二夜の宿泊に過ぎんだ。どうも解らん。そ
れにしても家の人達はどうしたんだらう。親父さん、お

母さん、それからお繁しげさん、もう寝たのかしら。お繁さんはきつと家に居ないに違いない。お繁さんが居れば、まさかこんなにおれに厭な思いはさせまい。そうだきつとお繁さんが居ないに違いない。

予は洋燈を相手に、八畳の座敷に一人つくねんとしてまとまった考えがあるでもなく、淋しいような、気苦しいような、又口惜くやしいような心持に気が沈む。馬鹿々々しく頭が腐抜けになったように、吾れ知らず「こんな所へくることよせばよかったなア」と又独言ひとりごとちた。そんな事で、却かえつて岡村はどうしたろうとも思わないでいる所

へ、蚊帳かやの釣手の鑲かんをちやりちやり音をさせ、岡村は細君を先きにして夜の物を運んで来た。予は身を起して之これを戸口に迎え、

「夜更にとんだ御厄介ですなア。君一向蚊は居らん様じやないか。東京から見るとここは余程涼しいなア」

「ウン今夜は少し涼しい。これでも蚊帳なしという訳にはいかんよ。戸を締めると出るからな」

細君は帰って終う。岡村が蚊帳を釣ってくれる。予は自ら蒲団を延べた。二人は蚊帳の外で、暫く東京なる旧友の噂うわさをする、それも一通りの消息を語るに過ぎなか

った。「君疲れたろう、寝やすんでくれ給え」岡村はそういつて、宿屋の帳附けが旅客の姓名を宿帳へ記入し、跡でお愛想に少許り世間話をして立去るような調子に去って終った。

予は彼が後姿を見送って、彼が人間としての変化を今更の如くに気づいた。若い時代の情熱などいうもの今の彼には全く無いのだ。旧友の名は覚えて居っても、旧友としての感情は恐らく彼には消えて居よう。手っとり早く云えば、彼は全く書生氣質が抜け尽して居るのだ。普通な人間の親父になって居たのだ。

やれやれそうであった、旧友として訪問したのも間違っていた。厄介に思われて腹を立てたも考えがなかった。予はこう思うて胸のとどこおりが一切解けて終った。同時に旧友なる彼が野心なき幸福を悦んだ。

欲を云えば際限がない。誰にも彼にも非常人的精進行為を続けて行けと望むは無理である。子を作り、財を貯え、安逸なる一町民となるも、また人生の理想であると思われぬことはない。普通な人間の親父なる彼が境涯を哀れに思うなどは、出過ぎた料りょうけん簡じやあるまいか。ま

ずまず寝ることだと、予は雨戸を閉めようとして、外の

空気の爽かさを感じ、又暫く戸口に立った。

風は和ないだ。曇なっては居るが月が上ったと見え、雲がほんのり白らんで、朧おぼろげ気に庭の様子が判る。狭い庭で軒に迫る木立の匂い、苔こけの匂い、予は現実を忘るるばかりに、よくは見えない庭を見るとはなしに見入った。

北海の波の音、絶えず物の崩るる様な響、遠く家を離れてるといふ感情が突如として胸に湧わく。母屋の方では咳せき一つするものもない。世間一体も寂然と眠に入った。予は何分寝ようという気にならない。空腹なる人の未だ食事をとり得ない時の如く、痛く物足らぬ心の弱りに落

ちつくことが出来ぬのである。

元氣のない哀れな車夫が思い出される。此家の門を潜り入った時の寂しさが思い出される。それから予に不満を与えた岡村の仕振りが、一々胸に呼び返される。

お繁さんはどうしたかしら、どうも今居ないらしい。

岡村は妹の事に就て未だ何事もおれには語らない。お繁さんは無事でしょうかと、聞きたくてならないのを遂に聞かずに居った予は、一人考えに耽ふけって愈いよいよ其物足らぬ思いに堪えない。

新潟を出る時、僅かな事で二時間汽車の乗後れをして

から、柏崎へ降りても只淋しい思いにのみ襲われ、そうして此家に著いてからも、一として心の満足を得たことはない。其多くの不満足の中に、最も大なる不満足は、此家にお繁さんの声を聞かなかつた事である。あアそうだ外の事は一切不満足でも、只同情ある殊に予を解してくれたお繁さんに逢えたら、こんな気苦しい厭な思いに悶々もんもんしやしないに極きまつてる。いやたとえ一晩でも宿とめて貰つて、腹の中とは云え悪くいうは気が咎とがめる、もうつまらん事は考えぬ事と戸を締めた。

洋燈を片寄せようとして、不ふ図と床を見ると紙本半切しほんはんせつの

水墨山水、高久靄看たかくあいがいで無論真筆紛れない。夜目ながら墨色深潤大いに気に入った。此気分のよいところで早速枕に就くこととする。

強いて頭を空虚に、眼を閉じてもなかなか眠れない、地に響くような波の音が、物を考えまいとするだけ猶強なおく聞える。音から聯想れんそうして白い波、蒼あおい波を思い浮べると、もう番神堂が目に浮んでくる。去年は今少し後であった。秋の初め、そうだ八月の下旬、浜菊の咲いてる時であった。

お繁さんは東京の某女学校を卒業して、帰った間もな

くで、東京なつかしの燃えてる時であつたから、自然東京の客たる予に親しみ易い。一日岡村とお繁さんと予と三人番神堂に遊んだ。お繁さんは十人並以上の美人ではないけれど、顔も姿もきりりとした関東式の女で、心意気も顔、姿の通りに快濶な爽かな人であつた。こう考えてくるとお繁さんの活々とした風采が明かに眼に浮ぶ。

土地の名物白しろがすり 絣の上布に、お母さんのお古だという藍あいなずみ 鼠どんすの緞子の帯は大へん似合っていた。西日をよけた番神堂の裏に丁度腰掛茶屋に外の人も居ず、三人は緩ゆつくり腰を掛けて海を眺めた。風が變つてか海が晴れてくる。

佐渡が島が鮮かに見えてきた。佐渡が見えると海全面の景色が皆活きてくる。白帆が三つ東に向って行く。動かない漁舟、漕ぐ手も見ゆる帰り舟、それらが皆活気いさりぶねを帯びてきた。山の眺めはとにかく、海の景色は晴れんけりや駄目ですなアなどと話合う。話はいつか東京話になる。お繁の奴は東京の話というと元気が別だ。僕等もう東京などちつとも恋しくない。兄がそういえばお繁さんは、兄さんはそれだからいけないわ。今の若さで東京が恋しくないのは、男の癖に因循な証拠ですよ。生意氣いうようだけど、柏崎に居ったって東京を忘れられては困

るわね矢代さん。そうですねとも僕は令妹の御考えに大賛成だ。

こんな調子で余は岡村に、君の資格を以てして今から退隱的態度をとるは、余りに勇氣に乏しく、資格ある人士の義務から考えても、自家将来の幸福を求むる点から考えても、決して其道でないと言いた。岡村は冷かに笑って、君の云うことは尤^{もつと}もだけけれど、僕は別^{もつ}に考えがあるという。兄さんの考えというのは怪しいとお繁さんが笑う。妹さんの云う通りだ、東京がいやというは活動を恐れるのだ。活動を恐れるのは向上心求欲心の欠乏に

外ならぬ。おれはえらい者にならんでもよいと云うのが間違っている。えらい者になる気が少しもなくても、人間には向上心求欲心が必要なのだ。人生の幸福という点よりそれが必要なのだ。向上心の弱い人は、生命を何物よりも重んずることになる。生命を極端に重んずるから、死の悲哀が極度に己れを苦しめる。だから向上心の弱い人には幸福はないということになる。宗教の問題も解決はそこに帰するのである。朝あしたに道を聞いて夕べに死すとも可なりとは、よく其精神を説明して居るではないか。

岡村は欠^{あく}びを噛みしめて、いや有がとう、よく解った。
お繁さんは兄の冷然たる顔色に落胆した風で、兄さんは
結婚してからもう駄目よと叫んだ。岡村は何^なに生意気な
ことをと目に角立てる。予は突然大笑して其いざこざを
消した。そうして話を他へ転じた。お繁さんは本意なさ
そうにもう帰りましようと言出して帰る。予はお繁さ
んと岡村とあべこべなら面白いがな、惜しい事じやと考
えたのであった。

予は寝られないままに、当時の記憶を一々頭から呼び
起して考える。其^{それ}を思うとお繁さんの居ない今日、岡村

に薄遇されたのに少しも無理はない。予も腹のどん底を
白状すると、お繁さんから今年一月の年賀状の次手ついでに、
今年の夏も是非柏崎へお越しを願いたい。今一度お目に
掛けて信仰上のお話など伺いたく云々うんぬんとあつたに動かさ
れてきたと云つてもよい位だ。其に来て見れば、お繁さ
んが居ないのだから……。お繁さんは結婚したのだから、
どんな人と結婚したか。お繁さんに不足のない様な人は
無造作にはあるまい。岡村に一つ聞いて見ようか、いや
聞くまい、明日は早々お暇いとまとしよう……。
いつしか疲れを覚えてとろとろとしたと思うと、さす

がに田舎だ、町ながら暁を告る鶏の声がそちこちに聞える。あ鶏が鳴くわいと思つたと思つたと、其のままぐつつすり寝入つて、眼の覚めた時は、九時を過ぎている。朝日が母屋の上からさして、雨戸を開けたらかつと眼のくらむ程明あかるかつた。

これから後のことを書くのは、予は不快に堪えない。しかし書かねば此文章のまとまりがつかぬ、いやでも書かねばならない。予は自分で雨戸をくり、自分で寝具を片づけ、ぼんやり障子の蔭かげに坐して庭を眺めていた。岡村は母屋の縁先に手を挙げたり足を動かしたりして運動

をやつて居る。小女が手水ちようずを持つてきてくれた。岡村は運動も止やめて家の者と話をして居るが、予の方へ出てくる様子もない。勿論茶もちろんも出さない。お繁さんの居ない事はもはや疑うべき余地はないのであつた。

昨夜からの様子で冷遇は覚悟していても、さすが手持無沙汰な事おびただ夥おびただしい、予も此年をしてこんな経験は初めてであるから、まごつかざるを得ない訳だ。漸く細君が朝飯を運んでくれたが、お鉢という物の上に、平べったいしおぜのお膳、其に一切を乗せ来つて、どうか御飯をという。細君は総すべてをそこに置いたまま去つて終う、一

口に云えば食客の待遇である。予はまさかに怒る訳にもゆかない、食わぬということも出来かねた。

予が食事の済んだ頃岡村はやってきた。岡村の顔を見れば、それほど憎らしい顔もして居らぬ。心あつて人を疎ましくした様な風はして居らぬ。予は全く自分のひがみかとも迷う。岡村が平気な顔をして居れば、予は猶更平気な風をしていねばならぬ。こんな馬鹿げた事があるものか。

「君此靄看は一寸えいなア」

「ウン親父が五六日前に買ったのだ、何でも得意がつて

いたよ」

「未だ拝見しないものがあつたら、君二三点見せ給えな」
「ウンあんまり振るつたのもないけれど二つ三つ見せよ
か」

岡村は立つ。予は一刻も早く此こゝに居る苦痛を脱したく
思うのだが、今日昼前に渋谷がくるかも知れないと思う
ままに、今暫くと思ひながら、心にもない事を云つてる。
こんな時に画幅など見たって何の興味があるう。岡村が
持って来た清しんちよう朝人の画を三幅程見たがつまらぬものば
かりであつた、頭から悪口も云えないで見ると、これも

苦痛の一つで、見せろなど云わねばよかったと後悔する。何もかも口と心と違った行動をとらねばならぬ苦しき、予は僅かに虚偽の淵ふちから脱ける一策を思いつき、直江津なる杉野の所へ今日行くという電報を打つ為に外出した。帰ってくると渋川が来て居るといふ。予は内廊下を縁に出ると、驚いた。挨拶にも見えないから、風でもひいてるのかと思つていた岡村の親父は、其所そこの小座敷で人と碁を打つて居る。予はまさかに碁を打つて居る人に挨拶も出来ない。しかしどうしても其の前を通らねばならない。止むを得ず黙つて通つたが、生れて覚えのない苦

痛を感じた。軽侮するつもりではないかも知れねど、深い不快の念は禁じ得なかつた。

予は渋川に逢うや否や、直ぐに直江津に同行せよと勧め、渋川が呆あきれてるのを無理に同意さした。茶を持ってきた岡村に西行汽車の柏崎発は何時かと云えば、十一時二十分と十二時二十分だという。それでは其十一時二十分にしようときめる。岡村はそれでは直ぐ出掛けねばいかんと云う。

岡村は義理にも、そんなに急がんでもえいだらう位は云わねばならぬ所だが、それを云わなかつたところを見

ると、岡村家の人達は予を余程厄介視したものである。予は岡村の家を出ずる時、誰とも別れの挨拶をしなかった。おしろいをこつてり化粧した細君が土間に立ちながら、二つ三つお辞儀をしたのみであった。

岡村は吾々より先きに門に出て居った。それでも岡村は何と想着か、停車場では入場券まで買うて見送ってくれた。

予は柏崎停車場を離れて、殆ど獄屋を免れ出た感じがした。岡村が予に対した仕向けは、解ってるようすこぶで又頗る解らぬ所もある。恋は盲目だことわざという諺ことわざもあるが、お

繁さんに於^おける予に恋の意味はない筈なれども、幾分盲
目的のところがあつたものか、とにかく学生時代の友人
をいつまで旧友と信じて、漫^{みだり}に訪問するなどは警戒す
べきであろう。聞けば澁川も一寸の事ではあるが大いに
不快であつたとのことである。

(明治四十一年九月)

日本文学電子図書館

野菊の墓

著 者：伊藤左千夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館